

研究所ニュース No. 6

2004年4月25日発行

特定非営利活動法人 非営利・協同総合研究所 いのちとくらし

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷 1-29-3

日本パーティビル 4F

電話 03-5770-5045 Fax: 03-5770-5046

E-mail: inoci@inhcc.org

HP: www.inhcc.org

事務局からのお知らせ

総会とシンポジウム、研究費助成、ブックレット

2004年度定期総会とシンポジウム

当研究所の2004年度定期総会が、2004年6月19日(土)午後15時に全労連会館において開催されます。詳細は後日連絡しますが、当日にはシンポジウムを同時開催します。ふるってご参加くださいますようお願い申し上げます。

研究費助成の決定

2004年3月末までに応募いただいた研究費助成について、審議の結果、助成内容が決定されました。後期の募集は9月締め切りです。個人研究、団体研究ともに公募しています。概要は下記のとおりですが、詳細についてはホームページ参照、あるいは事務局へお問合せください。

- ・ 個人研究への助成 30万円程度(最高50万円)
- ・ グループへの助成 100万円程度(最高200万円)

総研いのちとくらしブックレット No.1『医療・介護の診療報酬制度のあり方』発行(2004年2月発行、頒価150円)

機関誌6号でご紹介したとおり、受託研究をまとめたブックレットを発行しました。政府が医療や福祉、年金といった社会保障の分野に市場の論理の導入・営利化を促進しようとしている中、日本における医療制度の歴史的概要、診療報酬制度の動きを振り返り、あるべき医療・介護制度とはなにかを、追求しています。希望者は事務局までご連絡ください。

シリーズ研究機関訪問 第3回 日本生協連医療部会

シリーズ第3回は、日本生協連医療部会である。厳密には研究所ではないが、「まちづくり」や「いのちとくらし」を追求することは同じであること、事務局が同じ千駄ヶ谷に位置するご近所であることなどから、今回の訪問となった。事務局次長の平沢民紀氏にお話を伺った。

医療生協とは、生協法にもとづく住民の自主的組織である。現在、全国に組合員数は240万世帯（日本の全世帯の約5%）であるという。職員数は約2万人、事業所総数は、1,700ヶ所を越え、病院や診療所をはじめ、介護老人保健施設や訪問看護ステーションなどがある。組合員は班会活動を中心に、健康づくりやまちづくりなどを追求している。この様子は月刊誌『comcom』やホームページからも伺える。

また職員・組合員の教育・学習の一環として通信教育を行っているが、このコースが医療生協の歴史とまちづくり、保健・医療と協同組合、医療生協の経営などを扱い、多岐に渡っている。職員教育では新人教育などに利用され、組合員は学習会で利用することが多く、毎年1万人の受講者があるという。活発な活動は、「『組合員要求実現の無限のサイクル』を活かし、まちづくりの夢とロマンを実現できる事業活動をすすめます。」「世界にひろがる医療生協の『地域まるごと健康づくり』をめざします。」とチャレンジ目標は広がっている。



：所在地 〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷 4-1-9
TEL 03-3497-9177 FAX 03-3403-0614 URL :
<http://www.jhca.coop/index.html>

何のことやらさっぱり判らないかもしれないが、私は 90 年代より注目している事柄である。英語のイニシャルであるが、「社会的責任投資ファンド」と訳されている。フランスでの実践などが時折紹介されているが、市場を通じた資金投資ファンドの一つの方式であり、そのファンドの目的は儲かりそうな企業や事業への投資ではなく、例えば環境に優しい製品を開発販売している企業への投資、有機農法にこだわり続ける事業への投資、エネルギー再生循環型商品の販売会社への投資など、環境や社会に対する責任を重視する取組を実践する企業への投資を積極的に行うファンドである。

弱肉強食の市場経済下でしのぎを削る数多のファンドの中で、この S R I F は、極端な高利回りは実現できないものの、ほぼ安定して投資収益を確保しているものが多いと言われている。その理由は、当該投資対象企業や事業の商品やプロジェクトが市場の中で、消費者や国民らの静かな共感を得つつ爆発的には売れなくても安定した需要の創造を実現しているからに他ならないと思われる。我が国の投資ファンドの中にも、この S R I F に近いファンドも生まれつつあるが、まだその認知度は低く、どのような企業や事業への投資が社会的責任重視となるのか、そのビジネスモデルは確立されてはいない。

私はこの S R I F の考え方をさらに発展させた投資ファンドが成り立たないのかを考えている。すなわち社会的経済投資ファンド、もしくは非営利企業投資ファンドである。全日本民医連が長年実践し続けている特定協力借入金の取組はその変形的な、非市場経済的な在りようであるが、市場を通じて、投資ファンドを通じて自由に非営利企業や社会的経済企業に投資が可能となる仕組みが出来ないものかと思考しているのである。こんな夢物語を語ると、非営利企業では投資収益など期待できない、破綻したらどうするのか、誰がそんな投資ファンドに資金を供給してくれるのか、など疑問の声が挙がる。しかし、特定協力借入金の実践にみられる如く、低利または無利子でも支援していただける人々が無数に存在していること、多くの非営利団体等では独占的金融資本に超低利預金での運用を余儀なくされており、かつ、その保有する資金量は莫大であること、非営利企業での資金調達には資金運用利回りより 1 桁高い利率での借入金に頼らざるを得ず、しかもスムーズには貸出供給されないのが現実の実態であること、私的営利企業の破綻頻度に比べれば非営利企業の破綻数はゼロに等しいこと、これらの事実や実態や想定を前提にすれば、多くの庶民や非営利団体等が安心して資金運用できかつ、その投資ファンドから適正な非営利・協同企業らが資金供給を安心して受けられる、こんな仕組みが成り立つことが間違いない、と密かに構想を練っては、一人で喜んでいるのである。この 20 数年、非営利・協同の企業団体等に深く関わり続けて来た私自身の到達点なのかもしれない。我が研究所での調査研究も視野に入れつつ、時が熟すのを待っているのである。

今、改めて「帝国」とは

藤野 健正

ソ連邦崩壊以後、唯一の超大国となったアメリカ合衆国をローマ帝国と比較した帝国と見なす論が盛んになされてきたがその真意のほどはいかなるものであろうか。今回はこの帝国論議の火付け役となったアントニオ・ネグリとマイケル・ハートの共著『帝国』を中心に関連する何冊かを紹介してみたい。

1991年の湾岸戦争と1999年のコソボ紛争という2つの新しい戦争に挟まれた大きく揺れ動く時期のただ中であって、優れた時代感覚を通して著者たちは新しい生政治(バイオポリテックス)をかぎ分けていくのである。このころ日本においてはバブル崩壊の進行中で「失われた10年」といわれ「アメリカンスタンダード」「グローバリゼーション」という言語が飛び交っていた時代だ。副題にもある、「グローバル化の世界秩序について」はネグリとハートは新しい政治秩序、新しい主権形態の構成であると指摘し、「帝国」はかつての帝国主義とは異なり、ある中心的な国民国家の主権とその拡張の理論に基づくものではない。「帝国」的主権は脱中心化されたネットワーク状の支配装置なのであり、物理的領土を必須の要素としていた国民国家の主権とは違い、そのような意味での領土をもたない非-場である、よって合衆国もまた中心とはなりえないと指摘している。

ネグリとハートは 帝国 の秩序と権力に抗する主体としてデモクラシーの運動を根底的にとらえるために17世紀オランダの政治哲学者スピノザに由来する「マルチチュード」という概念を導き入れている。ここではマルチチュードは社会における下層、抑圧された群衆を指しており、「人民」との区別を行っている。具体的行動として、89年天安門事件、92年ロサンゼルス暴動、95年パリ連続スト、96年ソウルの大ストライキ等を例に新しいプロレタリアートの団結とラディカリズムをみた。これらの行動は政治的、経済的闘争であるばかりではなく社会的・文化的闘争でもありそれゆえ生政治的な闘争であり帝国構造の普遍的システムに打撃を与える。こうした闘争形式はマルクスが考えていたようなモグラがトンネルを掘るやり方ではなく(時々穴からでて戦いすぐ穴に潜ってしまう) 蛇が常にくねくねとうねるような形式で進行し、帝国の至る所に出現する。生産・政治のグローバル化に対する戦い方は垂直的な組織、水平的な連結といった形式をとらずくねくねと蛇行しながら突然跳躍し帝国の心臓に食らいつくのだ。マルチチュードの反対の意思表示の仕方は遊牧、放棄、逃走 = 新野蛮主義と称している。

マルチチュードの可能性として：

1) グローバルな市民権：大量に流動する外国人労働者であっても、彼ら =

マルチチュードが居留と労働の権利を得ることができることにあり帝国装置によるマルチチュードへの生産と生命のコントロールに直接挑戦してこそ、新たな連帯のイメージをデザインすることができる。2)社会的な報酬権:新たなプロレタリアートはもはや工業生産を行うプロレタリアートだけではなく、あらゆる人々が帝国における生産関係に引き入れられている以上、社会的な報酬によりあらゆる人々の収入を保証しなければならない。これこそがグローバルな市民権の重要な一環である。3)生産手段の再流用権:マルチチュードが知識、情報、コミュニケーション、および感情を自由に使用したり抑制する権利である。こうした新たな生産手段を掌握できてこそ、マルチチュードは統合性のある計画の形成、自己の生命の構築、敵への対抗が可能となり、新たな社会を想像できるであろうとみている。

ハートとネグリはマルクスの政治経済学を踏襲しながら、生産関係の観点からマルチチュードを労働者階級と置き換えて、政治、社会、文化および人間の欲望の世界へとひろげ、帝国の巨大さは革命的主体性としてのマルチチュードの巨大さでもあり、

帝国が自己の権力を強化させるとき、帝国は同じプロセスを通して、自らの転覆と崩壊の可能性をも増大させると結論づけている。

一方、エマニエル・トッドは著書『帝国以後』においてもアメリカ帝国の脆弱さを分析・研究し、その崩壊を予告している。理由は工業生産の不振による急速な貿易収支赤字の増大

分をドルという基準通貨の力が引き寄せる全世界から集まる資金によって支払っている「略奪者」だからだと言い切る。しかもソ連邦崩壊とともに「自由のための保護者」としての役割も終わりを告げた。本来ならばここで普通の国に戻るべきところを奇妙な帝国=世界警察国家として認めさず道を選択してしまった。具体的には「悪の枢軸国」を指名し「小規模軍事行動主義」によって己の存在を世界に認めさせようとして軍事力をちらつかせることにより、かえって世界秩序の安定をかく乱させていると指摘している。人口学者であるトッドにとって、世界史を進展さす真の要因は、識字化と受胎調節の普及であるとし、「テロリズムの脅威」も人口学的移行期の危機に他ならないと見抜く。

トッドがアメリカ合衆国に勧告するのは、帝国をあきらめ普通の強国として他の大国との間に対等の関係を築き上げることだと指摘する。

また、真の力とは人口学的・教育的な分野に属するものであり、真の権力とは経済的分野に属するものである。正道を踏み外して、アメリカ合衆国との軍事力の競争という屋気楼の中に迷い込むことは、何の役にも立たないであろう。偽りの軍事競争は、現実の戦略的重要性を持たぬ国に絶えず介入するという事態に立ち至る。アメリカの側にたってイラクに介入するというのは、流血の悲喜劇の中で端役をこなすだけに過ぎない。

20世紀にはいかなる国も、戦争によって、もしくは軍事力の増強のみに

よって、国力を増大させることに成功していない。フランス、ドイツ、日本、ロシアは、このような企てで甚大な損失を蒙った。アメリカ合衆国は長い期間にわたって、旧世界の軍事的紛争に巻き込まれることを巧妙に拒んできたために、20世紀の勝利者になったのである。この巧みに振る舞ったアメリカという模範に従おうではないかとトッドは最大の皮肉を投げかけている。

マルチチュードの概念を論じたものがネグリとハートの友人であるパオロ・ビュルノの『マルチチュードの文法』です。「マルチチュード」は「人民」の反対語であり、「多数的なもの」あるいは複数制を意味し、国家という「政治的決定の独占」に身を任

せることなく公的領域の中で協力して行動する各人の相対のことを意味する「人民」は、国家へと収斂するもの。今日ではポストフォードイズムの労働者(労働するために人間のすべての能力、特に言語活動能力・名人芸に訴える人々)たちであり、公的なものと私的なもの、集団的なものと個的なものという対ではなく混ざり合い、重なり合っているという。我が国にはこれにピッタリ当てはまる言葉は見つからないが、韓国語には「多衆」という言葉があるという。今の韓国民主化の動きがまさにこれを意味しているのだと1人納得している。

(ふじのたけまさ、歯科医師)



いのくら書評いのくら書評いのくら書評いのくら書評いのくら書評いのくら書評

【いのくらエッセイ】 【いのくらエッセイ】 【いのくらエッセイ】 【いのくらエッセイ】 【いのくらエッセイ】



「春の公園読書」

祖田 智幸

ようやく山陰(当方は鳥根県松江市に在住)にも暗くて、長かった冬に終わりを告げる気候が戻ってきたようだ。山陰の春はいつも“黄砂”とともにやって来る。中国大陸奥地のゴビ砂漠などの砂が、強風に舞い上げられ、偏西風に流されて、日本海を渡り、遙か彼方の日本に舞い降りて来るのだ。無論太平洋側の各地にも舞い降りるのだろうが、山陰のそれは量が半端でない。黄砂が通過すると車のボディもフロントガラスも砂塵に埋まる。春先の休日の朝は決まって洗車が日課となるのだ。“はるばる数千キロ

もの彼方からよくここまで飛んできたものだ”と感心しつつ、偶然にも僕の車に舞い降りた“黄砂”に大自然のロマン、愛おしさを感じるのが、なにせ砂まみれの愛車をほったらかしという訳にもいかず、丁重にお引き取り願うのだ。

そんなこんなで洗車を終わると5歳の娘がいつものように“どこかに連れてって”とやって来る。

妻は日々の看護激務を癒したく、せめて日曜日の午前中くらいはゆっくり家で過ごしていたい。

僕は僕でせっかくの休日をもったいないから朝から目一杯過ごしたい。娘は晴れたお外で思いっきり遊びたい。三者三様の要求を実現すべく、“車には気をつけてね”“高い所に登っちゃダメだよ～”の声に見送られ、僕と娘は見違えんばかりの愛車で公園に出かけるのである。

案の定、春の陽気に誘われて多くの家族連れで賑わっている。娘は一目散にスベリ台に駆け上る。僕は、娘が見えるベンチの一角を確保し、子守りがてら、確実に訪れつつある春の陽を浴びながら、本を読むのだ。これが実に心地良い。今、読んでいるのが祖田浩一の「不機嫌な作家たち」(青蛙房)だ。新聞の書評、本の題名に興味を持ち購入したのだが、著者が“同姓”だったことに後で気付いた。日本中捜してもこの“祖田”姓は数十軒程度しかないだろう。しかもこの著者、高校の先輩で、僕の出身地の隣町出身でもあったのだ。本の内容は、出版社の編集者をやっていた著者が、当時関わった松本清張や壇一雄、水上勉など著名な作家の暮らしぶり、人となりなど編集者の目から見て感じたものをまとめ上げたものだ。特に松本清張の記載は、清張作品をこよなく愛する僕にとって興味を引いた。清張のそれは、藤井康栄「松本清張の残像」(文春新書)がより詳しい。著者はやはり30年間清張に関わり続けた編集者であり、現北九州市立松本清張記念館館長である。両書とも清張の人間性が良く伝わる描写となっており、編集者と作家の駆け引きなど面白いが、前者はあくまで、作品は評価しても、作家の人間性は限りなく否定的だ。“あいつは人が悪い、嫌いだ”と読み取れる。

最近テレビドラマで“砂の器”がブームだ。SMA Pの中居君が和賀英良役を演じているのが人気のようなのだが、松竹映画「砂の器」(野村芳太郎監督1974年)をまだ見ていない人はぜひ見てほしい。物語の根底には、ハンセン氏病の差別と偏見の問題があるのだが、親子の絆、人間の強さと脆さ、苦悩と葛藤、緻密に計算・構成された展開などさすが社会派小説の巨匠松本清張ならではの名作である。映画は映像の美しさ(放浪の旅での日本の四季、回想シーンなど)、音楽「宿命」、人間描写のすばらしさ、ベストキャスティングなど加わり、これ以上ない出来栄えとなっている。何度見ても込み上げてくるものがある。

ちなみに映画で和賀英良を演じたのは加藤剛さんだ。加藤さんは「3・20 国際共同行動」IN東京の賛同者の一人でもある。名“殺人犯”も、本当の殺人し

は許さないということだろう。

舞台もご当地島根県仁多町亀嵩。自然豊かな山村である。当研究所の坂根利幸副理事長からも自分の“坂根”姓のルーツを探るべく出雲坂根を訪ねたことがあるとお聞きしたことがあるが、両者間は20Kmほどしか離れていない同じ郡内の隣町同士だ。坂根先生のルーツがもし出雲坂根にあったとしたら、放浪する哀れな父子をほっておけなかった亀嵩派出所の三木謙一巡査同様、弱者の味方という点で共通する地域性なのだが出来過ぎか？まあ、麗らかな春の陽ざしのもと、そんな瞑想にも浸りつつ、「春の公園読書」は子守り（子供は大喜び、奥さんはご機嫌）+日光浴+読書時間確保＝“有意義な休日”を僕に与えてくれているのだ。

「父さん見て」・・・スベリ台から砂場遊びに転じた娘は“砂の器”ならぬ“砂のお城”を作って見せた。

（そた ちゆき、島根民医連事務局）



【いのくらエッセイ】 【いのくらエッセイ】 【いのくらエッセイ】 【いのくらエッセイ】 【いのくらエッセイ】

【いのくらエッセイ】 【いのくらエッセイ】 【いのくらエッセイ】 【いのくらエッセイ】 【いのくらエッセイ】

「大切なことはよく話し合うことです！」 暮らしの中の民主主義の徹底

森川 貞夫

3月11日から22日までスポーツにおける「非営利・協同」組織の調査でデンマークを旅した。これまでヨーロッパといえばイタリアの文化・スポーツ活動を主に見てきたので今回は思い切って「福祉国家」でのスポーツ事情を直接見てみようというのがねらいであった。

前半はコペンハーゲン周辺の地域スポーツクラブ、中間でコペンハーゲンから100kmほど離れたスラエルセ市を訪ねた。どこのスポーツクラブを訪ねても「自主性」「自発性」、それにクラブそれ

ぞれの「多様性」という言葉が印象に残った。国民の自主的・自発的な文化・スポーツ活動にはフォルケオプリュスニング（直訳では国民啓蒙教育だが国民の余暇活動あるいは日本風には生涯学習）法という法律で援助を受けることができるとのことだったが、2年前に中道政権に交代してからは政府の補助はかなり減り、実際には自治体によって支援の内容はさまざまのことであった。しかしどのクラブでも「もし金を出して口をはさむなら、金は受け取らない」という態度で

あった。

またどのクラブの指導者に話しても彼らは「大切なことはよく話し合うことです！」という。ふだん、もっとも大事にしていることは何よりもクラブメンバーどうしが「対話」することであり、またそれは楽しいことだともいう。

今、かれらの生活レベルでの課題はふえ続ける移民(どこへ行っても肌のちがいや顔つきのちがいきから移民だろうと思われる人たちに出会った)との「対話」と「統合」の問題だという。コペンハーゲン市内のあるバドミントンクラブはコート5面のフロアーの体育館を自前でもつ市民のクラブであったが、そこで指導していたインストラクターは黒人であった。英語がよく通じたので質問してみたが、5歳の子どもから高齢者まで800人ぐらいの会員、14人のボランティアと1人の専従管理人で運営しているという。何かスポーツ指導員の資格をもっているのかと尋ねると、「もっていない」「みんなと共に

発展途上でいい」「完璧である必要はない」と、胸を張って答えてくれた。付き添ってくれたデンマーク体操・スポーツ連盟(DGI)のコペンハーゲン市会長を勤め同じく市バドミントン協会の会長を兼ねているラスムス・ソーレンセン君が「お互いに発展しあい、影響しあい、学び合うことが一番大事」だと補足してくれた。彼は27歳、独身、コンピューター関係の仕事をしているという。

自分たちでやれることは自分たちでやる。意見がちがうのは当たり前、だから徹底して「話し合うことが一番大切だ」と確信をもって話す彼も若くしてDGIの国際委員会のメンバーの一人であるという。どことなく成長した「大人」を感じさせるが、これがデイリー・デモクラシー＝暮らしの中の民主主義の成果であろうといたく感動した。

(もりかわ さだお、日本体育大学教授)



【いのくらエッセイ】 【いのくらエッセイ】 【いのくらエッセイ】 【いのくらエッセイ】 【いのくらエッセイ】

理事長のページ

角瀬保雄

全日本民医連の第36回総会が2月26日から28日まで埼玉県のさいたま市で開かれ、私はその初日に研究所を代表して挨拶を行ないました。研究所の活動の紹介、民医連院所の直面する課題と今後の民医連と研究所の協力共同関係がその内容でした。いずれ総会の記録集に収録されることになるはずですので、機会があればご覧頂きたいと思えます。

ところで民医連総会は、私個人の研究史の上においても大きな意味をもっています。私はこれで民医連総会に3回参加していますが、2年に1回の開催ですから4年前からということになります。第1回目の2000年は大阪においてでした。それまで民医連総会には第3者の傍聴はなかったということですが、当時、非営利・協同の運動を研究していた私は、民医連運動に注目し、その関係から総会を是非とも傍聴したいものと思い、その希望を申し出たわけです。丁度、民医連の方でも開かれた民医連への新しい胎動が生まれてきたときで、快く受け入れていただきました。

2002年は北九州市で開かれましたが、その年の10月に非営利・協同総合研究所いのちとくらしが立ち上がり、私は理事長の責を担うことになりました。以来、民医連と研究所との協力共同の関係が強められて来ました。そして今回は研究所を代表しての参加となったということです。民医連は1953年の結成以来、昨03年で50周年の画期を迎えましたが、今日加盟組織1641カ所、共同組織会員（医療生協組合員と友の会会員）300万という史上最高の峰を達成しています。そしてこの総会では400万共同組織という新しい課題を設定しています。

と同時にこの間、民医連の目指す「無差別・平等」の医療には、小泉内閣の社会保障改悪の政策によって様々な困難がもたらされています。したがって、それとどうたたかうかが今回の総会の最大の課題となりました。まずイラク戦争にみられるように、戦争こそが人びとのいのちとくらしを破壊する最大の災厄であるということから、平和と憲法9条をまもる課題が前面にかかげられました。それとともに医療分野に関しては、国民的課題となっている医療の安全と医療・福祉の質の確保、内容の充実を目指し、それと関連して医師労働のコントロール、職員を守ることの重要性などが議論されました。

そうした中で私なりに注目した所は、マネジメント能力を高めることが随所で強調されたことです。民医連は以前から民主的管理運営ということをかかげてきておりましたが、理念にとどまり、その実践ということになると、これからであったことも否定できないところでした。病院機能の第三者評価やIT化（電子カルテの導入）などが強調され、科学的管理によって管理の水準を引き上げ、どんな事態にも耐えうる安定した経営基盤、経営体質をつくりあげることが課題となりました。

最後に「経営困難組織支援規定」が明文化され、全国連帯基金の形成へと踏み出したことも注目されます。これまでの山梨勤医協、福岡健和会、大阪同仁会の経営再建支援の教訓を集大成したもので、「火事場のくそじから」ではなく、平時からセイフティ・ネットを準備しておくことは、激動の時代の非営利・協同の運動にとって大切なことといえます。






本の紹介

田中夏子、杉村和美著『現場発 スローな働き方と出会う』

(岩波書店、2004年3月、2100円)



竹野 幸子

はじめに就職したときには、働く現場では成果をあげること、効率を重視し合理化を行うことが大切であり、それが出来ないならば「負け組」となり、リストラ対象と見なされるだろうと漠然とした恐怖を感じた。その職場は諸事情あって退職してしまっただが、そのとき以来、営利ではない、優先すべきものがあると私は思っている。

最近ではさかんに週末起業でビジネスチャンスを得て、より裕福になるのが「勝ち組」であるといった動きもみられる。インターネットを利用し、安定したサラリーマンの地位は手放さず、あわよくば独立の機会を伺うビジネスの存在は、個人の意志によって支えられており、利益を生むための仲間との協同はあっても、ディーセントワークのための協同は存在しない、望むべくもないかのようである。生き残るのは少数のみ、「負け組」の人は、どうすればいいのか。何らかの事情で勝ち続けられなくなったときの「勝ち組」には価値があるのだろうか。

本書は折り返しにあるように、「人間が大事にされる働き方を求めて、その考え方や実現のしかた、難しさも含めて紹介」されている。農村部の女性たちによる仕事起こし、都市部のコミュニティ・ビジネス、倒産企業の労働者による労働者事業体の立ち上げなどの現場から、どうすれば生きにくさ・働きにくさがある現状を、人間らしい生き方・労働へと進められるのかという模索の様子が報告されている。こうした人間が大事にされる働き方を模索する現場に共通しているのは、情報を開示し、問題を共有し、フラットな関係で話し合いを進めるということであった。

「スロー」とは単なる速度の問題ではなく、「スローワーク」とは、「質が高く、吟味されていること」「人々の暮らしを破壊しない働き方であること」そして「社会に向けた発信力のあること」といった、労働が本来持つべきさまざまな価値を表していることになるという。単に、利益を得ることが目的ではない働き方である。

もちろん報告された現場は労働市場のむしろ周辺部、外部からの発信であり、労働市場の中心部にいる雇用労働者にそのまま還流することはない。「スローワーク」の発想を具体化するには、大多数の労働者が感じている疲弊感を共有でき、事業体の論理や市場の論理を越えて話し合うことができる仲間が必要であろうとしている。その可能性として労働組合を示しているが、ただし現在主流である企業内労働組合ではなく、労働市場の周辺部にいる女性・障害を持った人々、高齢者、外国人労働者などを積極的に受け入れる変化した労働組合の活躍が期待されている。不勉強でご紹介するのも大変申し訳ないが、読み進めやすく、勉強の参考として読みたい本である。

事務局経過報告(2004年1月～3月)

<p>【1月】 (行事)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・9日 ブックレット打ち合わせ ・17日 第2回研究企画委員会 ・21日 ブックレット打ち合わせ ・30日 機関誌6号座談会 	<p>(事務処理)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ブックレット発行準備 ・機関誌6号取材 ・会員名簿整備 ・HP更新 ・中間決算
<p>【2月】 (行事)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・12日 第2回機関誌委員会 ・20日 ブックレット発行 ・26-28日 全日本民医連総会参加 ・27日 機関誌6号発行 	<p>(事務処理)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ブックレット編集 ・HP更新 ・資料整理 ・機関誌6号編集
<p>【3月】 (行事)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・19日 第4回理事会 ・24日 第3回公開研究会 ・28-29日 機関誌7号座談会 	<p>(事務処理)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ブックレット編集 ・ニュースNo.6準備 ・機関誌7号準備 ・資料収集

2004年4月25日現在の会員状況

団体(正会員65、賛助会員5)、個人(正会員137、賛助会員30)

2004年度が始まった。研究所の年度は4月1日から3月31日であり、年会費もこの期間の分として頂いている。年度の途中に入会くださった方には、その年度の発行物バックナンバーを送付することになっている。どうぞよろしくお願い申し上げます。

4月中旬に、イラク情勢が緊迫した。様々な世論の一部ではあっても、わからないことは考えず、誰かに簡単にわかりやすく説明してもらうことが当たり前であり、説明されずに省略されたことは考慮しないで理解・判断するのが当然となっている、そんな風潮があるように感じた。想像力の欠如という言葉もいろいろなところで使われているが、今回も気になった。知性とはなにか、自省したい。

ワーキンググループ、研究会の活動が始動する。詳しくはメールマガジン、ホームページ、次号機関誌・ニュース等にてご紹介する予定である。(竹)